

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 43

関西大学博物館彙報

平成13年9月30日発行

[SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



末永雅雄先生復元甲冑

目次

能登のフロ鍬	2
明日香キトラ古墳壁画の玄武図について	4
宋の仁宗永昭陵と英宗永厚陵	7
五島・福江島の海外交渉史跡	9
歴史系博物館における子ども向け展覧会	11
八十島吉蔵氏寄託「ガンダーラ仏伝図」石製浮彫	13

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

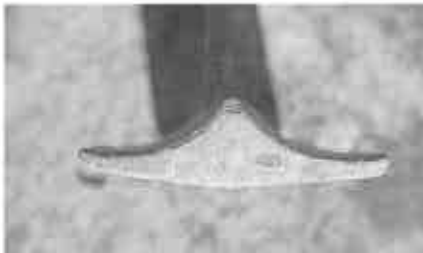
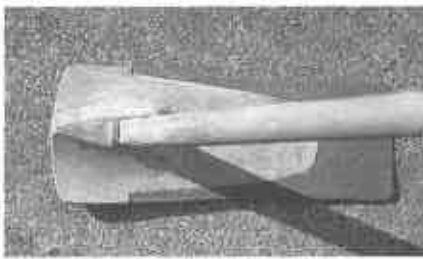
Tel 06-6368-1171 (直通) FAX 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

能登のフロ鍬

上 井 久 義

鍬は、農耕を考える場合に、重要な役割りを果たしてきた。近年、木製品の出土例が増加して、その実態がより明らかにされるようになった。その形態は、板状の一部に孔があり、ここに柄となる棒をさしこんでいる。板が薄いと柄をさしこんだ場合の強度が保てないので、孔の部分だけに厚みをもたせる形になっている。板に厚みをもたせる凸部は、板の一方の面のみにつくりだされ、表裏の凸部をつくりつけた例はない。したがってこれを復原する場合には、鍬を使用する形で手に持つと、手前に凸部を付けた形と、裏面にこれをつけた形に類型化される。板に柄を通すとT字型になるが、耕作に適した角度を持たせるために孔に傾斜がつけられている。さらに表面よりも裏面の孔が大きくあけられ、柄を持って耕した鍬をひきよせても、板がぬけおちないような仕口になっている。しかしその保存状態がよくないこともあって、どちら側から柄を挿入したのか、また板に対してどの程度の角度をつけて柄がとりつけられていたのかがきめがたい場合も多い。ときには板と柄が鈍角になる形に復原されて、鋤の形態にされている例もある。



和歌山県粉河の鍬

かつて長野県の東北部に位置する秋山郷で民家の移築作業に参加したおり、木製の鍬が数本残されていた。フロという板の部分に柄がとりつけられているが、金属の刃が装着されていない。木質もやわらかい材質が使用されていたようである。使用された痕跡もない。この民具がどのような理由で保管されていたのか不明であった。これと併せて柄の部分だけでも数本残されていた。形態は柄なのであるが、実用として柄になるものではなく、板に柄の形状をうつしたものと見えた。これはおそらく鍬を作る場合の型見本として保管されていたのではないかと思われる。フロ鍬は、一般には型木屋によって製作され、流通していたと考えられる。したがって型見本のようなこのフロ鍬は、かつて型木屋が保持していた品であったと考えられる。フロ鍬に型見本が存在したとすれば、その流布によって、一定地域に共通の型の鍬が使用されたことを示している。また使用者の好みや使い勝手にあわせて製作されたものではなかったようである。ある一定の地域で使用されるフロ鍬が同一の類型であるのはこうしたことによるのであろう。

フロ鍬は使用方法から見て概ね二つの型がある。一つは耕作用、他は畑の畝の溝土をけずって畝をたてる鍬である。耕作用に比べて溝土をすくう鍬は柄が長く、フロと柄の角度が鋭角にできている。民具として鍬をとりあげる際にはこのことに注意をはらい、フロと柄がどのような角度でとりつけられているかを計測して報告される。しかし実態としてはその鍬が使用されている状態が知りたいことになる。そこで耕作用の鍬を地面に打ち込んだ形で、地面と柄の角度を示すことに意味があるのではないかと考えられる。溝の土をすくう鍬は、地面と柄の角度がそのままフロと柄の角度を示すことになる。したがって鍬の柄の先端を揃え、柄の長さの差によって生ずる地面への打ちこみ角でその使用形態を理解する方法を考慮する必要があるのではないかと思う。

石川県の能登半島の北部では、12月にアエノコトと称する農耕儀礼が伝承されている。家の主人が羽織袴姿で鍬をかたげて田に出向く。家にほど近い田で一鍬土をおこし、田の神様を扇子にいただくようにして家に招き入れ、イロリのヨコ座まで案内する。次いで風呂に案内する。このとき、神様がいかにもお風呂を使っているように「湯加減はいかがですか」と声をかけたりしている。次は床に祭壇をもうけ、この前にならべられた供物の前に神を案内し、一品一品それが何であるかを説明しながら神にすすめる。この供物の両側に、先ほど使用したのと同型の鍬が置かれている。その形が特長的である。

フロ鍬の板状部分の断面は三角形状になるが能登と近畿地方で一般に使われているフロ鍬とは逆の形で使われている。使用する側から見ると手前が平板で、裏側に三角形の凸部がでっばっている。どちらでも同じことのようにはあるが、裏に出張りがあると、鍬を打ちこんだ際にこの部分が強くあたって土地に打ちこみにくいはずである。手前に出張りのある場合は、手前の足もとに土がくずれ落ちるので、使用上の不都合は生じない。

同じことであれば使い勝手のよい道具であるのがよいから、能登のフロ鍬の形式は興味深い。農耕儀礼に使用する鍬であるが、かつては実用で使用されていたものである。近畿各地の神社で御田植祭を伝承する例が多い。神社によっては、古いフロ鍬を祭具として使用している。またそれが祭具専用となって伝承されている例もある。大阪杭全神社で使用されている御田植祭のフロ鍬もその一つである。この場合は、鉄の刃がとり付けられておらず、フロの先端部を鉄の刃のように黒く着色している。高野山丹生神社の御田植祭用の鍬もほぼ同じである。これら



アエノコト



高野山丹生神社の御田植

は、現在使用されている祭具としてのフロ鍬が近世の実物の姿を間接的に写したものと見ることが出来る。いずれもフロの厚みは手前につくりだされているから、能登のフロ鍬とはその生い立ちが分れてから長い期間があったように思われる。使い勝手からみれば近畿地方で一般に見るものが便利である。これが一般化したのも使い勝手の便利さからであると考えられる。とすればこれから能登型のフロ鍬が考案されたとは考えにくい。この両者の形式を時代的に前後関係に置いて考えることに問題があるかもしれないが、能登のフロ鍬がより古い形式を現在に伝えたものと考えてみることはできないだろうかと思っている。

和歌山県下でいくつかのフロ鍬を見たが、いずれも近畿地方各地で一般に見られるものと同じであったが、板の部分の厚みを持たせる部分で肉薄に削りこまれ、三角形の断面のうち内側になる部分を削りこんで、三角形の上部が鋭角になる形になっていた。強度が保てればできるだけ削りこんで、フロ鍬をより使いやすく加工した結果と考えられる。より工夫の施された鍬が作られた地域ということになる。

「延喜式神名帳」には、神社名に加えて鍬とか鋤と注記された社がある。これは中央より記載の神社に対して農具が支給されたことを示している。この鍬がどのような形状であったか不明であるが、畿内で製産された鍬が、画一的に各地に流布した契機となったと考えられる。こうした流れのなかで能登地方の北部で現在も使用されている鍬の形態には、興味深いものを感じさせられる。



能登の鍬

明日香キトラ古墳壁画の玄武図について

網 干 善 教

(1)

奈良県明日香村阿部山に所在するキトラ古墳の石槨内に星宿、日月、四神図が描かれていることは以前の調査によって判明していた。ところが2001年（平成13）3月22日にデジタルカメラを挿入し撮影したところ新しく南壁に朱雀図が描かれていることが分かったと同時に北壁の玄武図の比較的鮮明な映像が得られた。

実は1983年（昭和58）11月7日、第1回目のファイバースコープの挿入により玄武図の遺存を確認していたが、映像が鮮明でなく詳細な観察はできなかった。今回はそれをある程度補うことができたと同時に玄武図の形態、表現などの手掛かりを把握することができた。それをもとに若干の私見を述べてみたい。

(2)

鑑鏡や瓦当、壁画などに四神像が表現されて

いる事例は中国をはじめ高句麗、百濟、さらにはわが国の文物にみられる。これは中国における四神思想を基調としていることはいうまでもない。したがって、28宿の北方7宿から具象化された玄武図があると、それは中国に由来するものであるとされるのである。ところが古墳壁画の場合、四神図を描かれたものが中国吉林省集安や北朝鮮平壤周辺の高句麗古墳壁画に著名なものが多いから、短絡的に玄武図があればすぐ高句麗古墳壁画と比較し、その影響、あるいは高松塚古墳やキトラ古墳の場合などでは絵師の問題にふれて、高句麗からの渡来若しくは渡来系の画工によって描かれたとする意見まで述べられたことがあった。果してそうであろうか。それは玄武図すなわち高句麗壁画という先入感があるのではなかろうか。確かに先述の如く四神思想は中国に由来する思想であり、表現であることは間違いないが、表現の方法、描写の技



キトラ古墳壁画の玄武図



江西大墓



高松塚古墳



薬師寺本尊台座



正倉院十二支八卦背円鏡

術など必ずしも同じものではないと考える。

例えば、高句麗古墳では集安にある五盔墳の第4号、第5墳、四神塚などの玄武と、有名な江西大墓の玄武図と、高松塚古墳、キトラ古墳、あるいは奈良薬師寺本尊如来像台座や正倉院御物八卦背十二支円鏡の玄武図などを比較すると相違する表現のあることが分かる。この表現の相違を無視して全く同一のものと考えたり、高句麗古墳にあるから、絵師は高句麗からの渡来人、あるいはその子孫であろうとか、具体的な人物として黄文連本実を挙げるなど、軽々に論ずるべきではないと思う。以下その理由を挙げておく。

(3)

キトラ古墳で確認した玄武図をもとに製作された玄武の模式図がある。この壁画のなかで、亀に蛇が絡む表現を観察してみよう。

西を向く亀が描かれる。この亀の顔は蛇と対峙している。蛇の顔から尻尾にいたる体の絡み方をみると1箇所絡みと1箇所の交叉するところがある。この頸から尻尾までの説明に便宜上、④、⑤、⑥の記号を符しておく。

蛇が顔から頸にいたるところの最初の交叉する位置④をみると頸の方が尻尾側の下を潜る。次に⑤の交点をみると、頸から上ってきた体は上側を通り交叉する。これで確かに絡まること



模式図

を表現している。

次に蛇体は亀の前脚の間を通り、甲羅を一重に巻いて、後脚を通り、上にはねあがる。尻尾との交叉する③では尻尾の方が下になる。これがキトラ古墳の玄武図であり、高松塚古墳の玄武図と同一の描き方である。

次に高松塚古墳以来、よく比較される資料に高句麗江西大墓の玄武図がある。江西大墓の玄武図では①は頸のところが上になり、②の交点では下になり、③では尻尾の方が上を通る。結論からいえば、江西三墓と高松塚古墳やキトラ古墳の玄武図とは全く逆の絡み方になる。すなわち江西大墓の玄武図を粉本としては、高松塚古墳やキトラ古墳の玄武図は描けないということにもなると考える。

次に奈良薬師寺本尊台座の玄武をみてみよう。①の交差点では頸が上を通り、②では下を通り絡む。③は上を通り、尻尾の方は下を通る。すなわち高松塚古墳やキトラ古墳と比較すると①、②での交叉状況は逆で江西大墓と同様であるが、③の状況は高松塚古墳やキトラ古墳と同じであり、江西大墓とは上下逆になる。

正倉院十二支八卦背円鏡を観察すると①、②、③とも高松塚古墳やキトラ古墳と同じ形状である。同時に江西大墓と逆であり、薬師寺本尊台座とは③の部分異なる。

一体これらの相違は何を意味しているのだろうか。その理由の適格な見解はいまのところない。ただ、玄武図といっても細部において画法や表現が異なる。こういう点を無視して玄武図があれば、高句麗、あるいは粉本は高句麗壁画であると主張してよいだろうか。より慎重な対応が肝要であり、近々に改めてこの類の資料

を集積して私見を述べることにする。

(4)

キトラ古墳玄武図に関連してもう一つの問題を検討しておきたい。キトラ古墳の探査によって南壁に、西向きの朱雀図が描かれていた。前回の2次にわたるファイバースコープによる探査の結果、東壁の青龍の一部、西壁の白虎、北壁の玄武図は分かった。ところが、西壁の原則に反して白虎が北向きに描かれていた。これをめぐっての意見が述べられた。そのうちの一つに見解に、四神図が時計廻りに描かれているというのがあった。ところが、玄武図は明らかに西を向いていることからこの意見は一瞬に否定された。

今回、朱雀が西向きに描かれていることをうけて再び百橋明穂氏のようにTVや新聞などのメディアを通じて時計廻りとし、これを循環構図とする所見を述べられた。これには大きな矛盾がある。それは玄武図である。四神図は本来、四方の7宿を具象化した図像であって、亀は西側に頭があり、西向きに描かれるものである。キトラ古墳の玄武を東向きとするのは極めて滑稽な見解である。それは、亀は東を向いているのではなく、蛇と向い睨み合っているのである。そこには東を向くという意識はない。例えば、集安四神塚などの資料に見られるように蛇の顔が玄武の顔と対峙しており東を向く亀という意識は感じられない。

もう一つ重要なことはこれを認めるとすると江西大墓にしろ、高松塚古墳、キトラ古墳をはじめ薬師寺本尊台座像や正倉院御物十二支八卦背円鏡など玄武図の大半はすべて東を向いているということとなる。そうすれば四神図の意味がなくなる。

(5)

学問的理解は同様な資料がある場合、できるだけ多くの資料を聚成し、その共通点、相違点を比較して事の真実を究めようとする方法をとる。単なる思いつきで、他の資料を全く無視して自説を主張することはよくない。所見を述べるのはよいが、単なる思いつきでなく、慎重な考察から結論を導き出す手法でなくてはならないと思う。

宋の仁宗永昭陵と英宗永厚陵

藤 善 眞 澄

内藤湖南博士の提唱いらい、唐宋の変革をめぐる論争が続けられ、今なお決着はついていない。将来もそれぞれの分野で、さまざまな視点からの分析が行なわれるであろうが、賛否はともかく、唐宋の制度で明確な違いを見事に突きつけるものがある。これまで紹介した唐朝の陵墓と大きく異なる宋朝のそれである。

すでに見た唐太宗昭陵の偉容をはじめ、高宗・則天武後の合葬墓乾陵、玄宗の泰陵などなど唐皇帝十八陵は、昭陵の九嵎山、乾陵の梁山、泰陵の金粟山といった塩梅に、すべて渭水の北に展開する山々をそのまま利用した陵墓である。これに対し北宋朝の陵墓は河南省鞏義市に散在し、隋代までにみられる盛土形式の墳墓であり、しかも陵号は唐代のそれと違って「永」字を共有する。

鞏義市は唐宋時代の鞏県であり、有名な石窟寺や唐三彩の窯址さらには筆架山を背にした詩人杜甫の生家がある。そして市の南部にひろがる田園地帯には、ここに紹介する二陵と、和義洵をはさむ北宋の陵墓があり、是非とも一度は訪れたいと念願していた地域であった。

石彫類はともかく、唐代の偉容を誇る陵墓にくらべ、遙かに見劣りのする宋の永厚陵と永昭陵を訪れたのは、昭和六十一年の夏である。開封では筆者の研究テーマの一つ『参天台五臺山記』にみえる開宝寺や大相国寺等の調査を終え、記念に木版の『清明上河図』を購入したのち、鞏県に向かった。鞏県石窟の見学をすませ、嵩岳および少林寺を經由して偃師県にある玄奘三蔵の故居をめぐるコース予定であったが、御無

理を願って宋の永厚陵と永昭陵に車を走らせて貰った。本音をいえば西南に位置する神宗の永裕陵が最大の狙い目であった。成尋一行の巡礼に最大限の優遇を与え、謁見はおろか成尋に雨乞いまでも命じ、また日本との国交回復をはかるなど因縁浅からざる皇帝だからである。残念ながら時間の都合がつかず、またの機会を待つことにし、最も近い二陵だけで満足せざるを得なかったという次第。

北宋の八陵は鞏県にあるが、芝田地域にある眞宗の永定陵を除き、残りの五陵は伊洛河に注ぐ滹沱河をはさんで太祖趙匡胤と太宗趙光義の永熙陵が西村地域に、宣祖趙宏殷の永安陵が蔡庄村、そして神宗の永裕陵と哲宗趙煦の永泰陵が八陵村に、と展開する。周知のとおり八代徽宗と次の欽宗は金軍の侵攻を受けたいわゆる靖康の難に遇い、虜囚の恥辱を受けたまま異郷の土となったので、陵墓はない。

まず四代目仁宗趙禎の永昭陵は鞏県城南にあり趙普、狄青などの陪葬墓がある。陵主仁宗（一〇一〇～六三）は眞宗の第六子にあたり嘉祐八年三月二十九日、福寧殿に崩じた。その在位は四一年の長きにわたった。諡は神文聖武明孝皇帝。同年の十月二七日、この永昭陵に葬られた。最初の皇后の郭氏は廃せられており二番目の皇后である曹氏の陪葬墓がひかえる。その治世は唐太宗の「貞観の治」、玄宗の「開元の治」の向こうを張って「慶曆の治」と称えられている。確かに韓琦・范仲淹・欧陽脩・司馬光らの名臣は綺羅星のごとく輩出し、文運隆々とまではいかないまでも北宋の全盛期を現出した





ことは間違いない。しかし一方では大夏の侵寇や遼の圧迫に苦しみ、両国に対する歳幣引き上げのため国家財政は窮乏の一途を辿るばかりであった。わざわざ「喪服は日を以て月に易え」つまり喪は一日を一ヶ月に換算して短縮し、かつ「山陵の制度は務めて儉約に従え」と遺言したのも、こうした国情に心痛してのことだろうか。唐代ならば陪葬墓程度の規模しかなく荒れはてた永昭陵の周辺を逍遙しながら、つつおいつ想いを千年前にめぐらせることであった。

永厚陵主の五代英宗趙暉（一〇三二～六七）は仁宗の従弟にあたる濮安懿王趙允讓の第十三王子。はじめ仁宗に男子がなく、養子に迎えられた。のち預王の誕生とともに実家へもどされたが仁宗の遺命によって位についたという複雑な経歴の持ち主である。やがて実父の扱いや称号をめぐる重臣間で「濮議」と呼ばれる激しい意見の対立が生じたのも、そのためである。仁宗の後継者である以上、仁宗が父である、否、血のつながりや孝の道からいっても濮王が父であることに変わりはない、といった主張に侃々諤々の論争が続いた。こうした欧陽脩・韓琦グループと司馬光・富弼グループとの論争は皇太后の裁量によって一応の決着を見たが、次の神宗朝において王安石の改革に賛成する新法党と、これに反対の立場をとる司馬光らの旧法党が対立するという、歴史に名高い朋党の争いへと道を拓くことになる。

元来病弱であった英宗は、在位わずか四年、治平四年（一〇六七）正月八日に三十六歳で福寧殿で崩じた。諡は憲文肅武宣孝皇帝。その年の八月二十七日、永厚陵に葬られたのであった。陪葬は宣仁聖烈皇后高氏、神宗は長子である。

本来は周囲に神牆をめぐる四隅に樓が設けられ、東西南北の四面中央には神門があった

らしい。訪れたときは南神門につづく、参道とおぼしいあたりの両側に、宮人や文武官僚、外国使節、鎮陵將軍などの像が立ち、見事な獅子・象などがトウモロコシ畑に神域を犯され雑草にからまれながら居並んでいた。一見して子供達の遊び場になっており、草スキーならぬ土スキーを楽しむ姿もあった。当時の社会情況からすれば、やがて完全に陵墓群も取り壊され、田畑と化すのではあるまいか、と危惧の念に襲われたものである。『詩経』王風・黍離の詩にちなむ故事成語「黍離の歎」あるいは「黍離麦秀の歎」が、ふと頭をよぎった。

一世の放蕩児幽王は驪山のおもいで殺され西周は滅んだ。『詩経』小雅・正月の詩に詠う「赫々たる宗周、褒姒これを滅ぼす」である。のち洛邑へ遷った東周の大夫が旧都鎬京をよぎったところ、西周の宗廟や宮殿はくずれおち、空しく黍畑となっているのをみて嘆きの詩をつくった、というものである。それから十年、私の危惧は幸いにも杞憂に終わった。

最近得た情報では、この永昭と永厚両陵区が宋陵公園として整備されているという。文化財を大切にしない国は発展しない。歴史に背を向ける国は衰える。折をみて再訪し、今度は神宗の永裕陵を中心に調査してみたいと考えている。



永厚陵浮雕端禽

五島・福江島の海外交渉史跡

松 浦 章

I

2001年3月初旬、京都女子大学植松正教授を研究代表とする科研調査の一員として長崎県福江市を訪れた。福江市は日本列島の最西端に位置する五島列島に属する福江島にある。そこでの海外交渉史跡について述べてみたい。

II

五島を支配したのは最初は宇久氏であった。五島藩主の第一代は文治三年(1187)の宇久家盛に始まるとされている。宇久氏は、鎌倉・室町時代にかけて九州西北部において勢力をもった松浦(まつら)党の一家であった。文禄元年(1592)に宇久氏は五島氏と改称し、五島列島の福江島に居城をおいたのであった。

朝鮮国成宗二年(1471)の申叔舟の『海東諸國紀』には、「五島、或称五多島、日本人往中國者、待風之地」と、日本から中国への風待ちの地であると記している。

五島が中国側の記録に頻繁に知られるようになるのは、明代以降のことである。

明・萬曆七年(1579)に刊行された茅瑞徴の『東夷考略』の「日本総図」(『玄覽堂叢書』第一輯所収)に記された中に、「貢舶必由博多開洋、歷五島而入中国。」とあるように、明の皇帝から冊封を受けた足利将軍は、中国への朝貢船いわゆる勘合船を派遣するが、その航路は博多から出港し、五島に寄港して中国へ向かったとされるように、近世の中国への航路において五島は重要な位置を占めていた。同書の図中の説明に、「五山相錯而生総名五島。」とある。海中に五の山がたがいにまじわるように生じていたことから、まとめて五島と名付けられたと記している。

簡単には五箇の島と考えるが、五島列島の主要な島は北から、北松浦郡に属する宇久島、小値賀島、野崎島。南松浦郡に属する中通島、若松島、奈留島。福江市に属する久賀島、杵島、そして福江市と南松浦郡に属する福江島と主要なものだけでも九つの島がある。

古くは五島とは宇久島、小値賀島、中通島、

若松島、福江島の五つの島を言ったようである。

明代の中国側の記録に多く記されるが、一例を『日本考』の倭船の条に見れば、「彼國開洋、必與五島取水、將近中國過下八山・陳錢之類、必停舶換水。」とあり、日本から中国へ向かう際は、必ず五島で新鮮な水を手に入れ、中国では浙江省の舟山列島の一島である下八山まではおよそ700キロの航海である。

16世紀の「順風相送」、18世紀初期の「指南正法」(向達校注『兩種海道針經』中華書局、1961年9月第1版、1982年第2次印刷)の海路指針書にも五島の名は見えることから、五島は日中間の航路上の重要な指針地であったことは明らかである。

III

福江市の史跡には文献上で決定出来るものは多くはないが、伝承として古くから伝えられた重要な海外交渉史跡がある。第一は福江市の福江川岸に近い六角井戸、明人堂、王直の居住地、勘次ヶ城である。

六角井戸(写真①)は、既に「平戸の海外交渉史跡」(『肝陵』No.41、2000年9月)でも紹介したように、日明関係の貴重な史跡の一つである。1954(昭和29)12月21日に長崎県教育委員会、福江市教育委員会により指定され、その揭示文に「県指定史跡 六角井(通称六角井戸)天文九年(1540)第十七題宇久家当主盛定公の頃、明国人王直が通商を求め福江(当時深江)に来航した。盛定公は喜んで通商を許可し、現在の唐人町の高台に居住地を与えた。その際彼



写真① 六角井



写真② 王直ゆかりの地（唐人町）



写真③ 明人堂



写真④ 山崎石壘

等の飲料用水としてつくられたのが、この六角井と伝えられている。井戸枠を六角形に板石で囲み、ちょうど六角柱を地中にたてたような井戸である。このような六角井は県下に数個見られるが、その場所はいずれも港町であり、中国との交易があった場所である。当時の日中交易を物語る重要な遺跡の一つである。」とある。

現在の唐人町には「王直ゆかりの地」という碑（写真②）があり、さらに王直らが航海の安全を祈念したとされる「明人堂」（写真③）が整備され王直の故郷である中国安徽省黄山市と福江市との近年の友好関係の歴史的証拠となっている。

勘次ヶ城は富江町にあり、山崎石壘（写真④）と呼称されるが通称は勘次ヶ城である。長崎県教育委員会が1970（昭和45）年1月16日に指定した掲示文では「13世紀から16世紀にかけ、北九州や瀬戸内を拠点とし、朝鮮半島や中国大陸をした海賊は、彼地で「倭寇」とよばれていた。この山崎石壘の構造は、当時、明国沿岸に築かれ海賊の築城と同型といわれ付近には、倭寇ゆかりの八幡瀬や唐人瀬があり、明銭、陶器破片、人骨が出土している。富江の豪族田尾氏は、松浦党に属し、ここを出城として海賊、密貿易で勢力をのびしたといわれる。その後廃墟に勘次という男が住んでいたことから俗に勘次ヶ城といわれている。」とある。海岸線に沿って迷路

のように石積みが巡らされ、その延長は約80m、石壁の厚さは基部で2m、高さは4mとされている（『角川日本地名大辞典42長崎県』1987年7月、1426頁）。この重要な石壘は富江町により周辺が整備され保存されている。さらに倭寇を模した高さ4m近い像（写真⑤）が興味を引く。

Ⅳ

上記のように五島列島の福江島には近世の海外交渉史跡として重要なものが残されている。しかし近世のものだけでなく、福江島の西北部にある三井楽町は『続日本後記』には遣唐船の寄港地として「旻楽（ミミラク）」と見え、遣唐使関係の史跡であることが知られる。このため同町は「遣唐使ふるさと館」を建設して観光スポットとなっている。

このように福江島は日中間を結ぶ航路上の重要な地理的位置にあったのである。



写真⑤ モニュメント倭寇像

歴史系博物館における子ども向け展覧会

宮 前 千雅子

1. はじめに

ここ数年、博物館において子ども向けの展覧会が開催されることが多くなってきた。夏休みともなると、その数はさらに増える。例えば今年の8月にどのような子ども向け展覧会が開催されたのか（ワークショップや展示解説等の行事も含む）を調べてみた（『博物館研究』Vol.36 No.7 2001年7月25日）。美術系では掲載されている館の1割強にあたる24館、歴史系ではおよそ2割の37館あった。もちろん、タイトルだけでは子ども向けだと判明しない展覧会もあるだろうから、実際にはもう少し多いのではないと思われる。

2. “子ども”ブームの到来

このような“子ども”ブームは、なぜ起こったのだろうか。元々、日本の博物館において、子ども向けの展示が盛んに行われてきたと言いき難い。しかし最近になり、海外での子ども博物館の取り組みが紹介されたり、生涯学習の振興、そして学校週5日制に向けての取り組みなどが進むにつれ、博物館全体が子ども向けの展示に関心を示すようになってきた。東京青山のこどもの城やキッズプラザ大阪など、いくつかの子どものための博物館及び相当施設も建設された。しかし、その数は非常に限られたものである。

このような現状を考えると、一般博物館においての子ども向けの展覧会は、数少ない子ども博物館を補完するものとしての位置付けが出来るであろう。

また1999年から3年間の予定で実施されている文部省（現文部科学省）による「親しむ博物館づくり事業」は、一般博物館においての子ども向け展示、とりわけ参加型の展示や取り組みを後押ししている。さらには2002年から教育現場で実施される「総合的な学習の時間」や、同じく2002年度から完全実施される学校週5日制の導入に伴い、子どもと博物館の関係は今以上に親密になることが期待されている。

3. 子ども向け展示の内容

では、子ども向け展覧会としてどのような展示がおこなわれているのであろうか。歴史系の博物館の展示を見てみよう。

ここでは、実際に筆者が訪れた辰馬考古資料館（兵庫県西宮市）と、亀山市歴史博物館（三重県亀山市）の二つの事例を紹介したいと思う。

辰馬考古資料館は、毎年夏休みを含む時期に、子ども向けの展示として夏季教室展を開催している。今年の夏季教室展は、6月16日から9月2日の間、「考古学入門教室」と題しておこなわれていた。そこでは、「考古学はなにをしらべるか」「年代のきめかた」「地層のはっくつ」「家のはっくつ」「文化のうつりかわり」「文化のひろがり」「物のかんさつ」「考古学でわからないこと」「あたらしい考古学」といった項目についての展示がおこなわれていた。全て初歩的なものであり、放射性炭素年代測定法なども簡単にわかりやすく説明がなされていた。印象的だったのは、考古学というと展示資料についての説明が多いように思うが、もちろんそれについての説明はあるのだが考古学とは何かを説明することに主眼が置かれていた点である。

それに一役買っていたのが、「土偶さん」と「埴輪くん」による会話形式のパネルである。関西弁でときには冗談を交えながらの2人の会話パネルが、そのまま展示内容の説明にもなっていた。最後の部分には、いわゆる参加型、ハンズ・オンのコーナーである土器を手で触るこ



ハンズ・オンのコーナー（辰馬考古資料館）

とのできる展示も設けられていた。

小学校低学年には少し難解かも知れないが、それ以上、そして考古学にあまり興味の無い大人にも、十分耐える内容であるように思う。考古学ファンならいざ知らず、一般の人間にはなんとなく近寄りがたいイメージのある考古学が、身近に感じられる展示であった。

次に亀山市歴史博物館の事例を紹介しよう。亀山市歴史博物館では、毎年夏休みに「こどもも！おとなも！調べて体験博物館」と題して、企画展示をおこなっている。今夏は「和紙でできたもの・和紙をつかったもの－どうやってできとるの?」というタイトルのもと、7月20日から9月2日まで展示がおこなわれた。展示構成は「和紙で書いた書類や手紙」「和紙にすった印刷物」「裏方としての和紙」「和紙の意外なつかい方」となっており、文書の他、屏風や蛇の目傘、行灯などが展示されている。また掛け軸を自分で掛けることができるコーナーもあった。

筆者が特に興味をそそられたのは、立体物だけではなく文書も対象とした展示であることである。文書の展示というと子どもを対象とした展示でなくても、「地味で質素な」というイメージがあり、とかく敬遠されがちである。その文書を、子どもも範疇に入れた展示で正面から扱うというのは全国的にも非常に珍しい。

筆者が訪れた際には、残念ながら子どもが展示を見ている光景にはお目にかかれなかった。しかし団体で見学に来ていた大人たちが、とても真剣に、また楽しそうに博物館の展示を見学している姿が印象的だった。

また参加型、ハンズ・オンの部分も上手く組み込まれていたように思う。見学者には展示を見る前に調査ノートが手渡され、あらかじめ4か所に穴が開けられたそれを自分で糸と針を持って綴じることから始まる。つまり、和綴を体験することになる。展示を見学する際にはそのノートを手にして、書き込んでいく。

4. おわりに

歴史系博物館の子ども向け展示を見てきた。最後に、歴史を扱う子ども向け展示で、何が大切なのか考え得る範囲で述べてみたいと思う。

まず一般的に歴史をテーマとした子ども向け展示は難しいのではないと思われる。というのも、歴史をテーマとした展示で扱われている



展示に見入る見学者（亀山市歴史博物館）

資料の殆どは、現在の生活ではあまり使用されていないものであり、特に子どもにとっては見たこともないものも多いであろう。それへの好奇心をどういざなうか、工夫が必要な点である。

また、子ども向け展示には参加型の要素が不可欠である。これまで歴史系で参加型という、考古学関連で「土器・石器を触ろう」「勾玉を作ろう」などといったもの、また民俗学関連で「農具を使おう」などといったものが多かったように思う。亀山市歴史博物館の事例は、文書を用いた場合も、参加型が可能であることを示唆しているように思う。博物館資料としてはかなりの数にのぼるはずの文書を、上手く使いたいものである。

亀山市歴史博物館、そして辰馬考古資料館の例からも、子ども向けとして開催されている展示ではあるが、大人も十分に楽しめるものであることがわかる。子どもだけで館を訪れることが少ない現状を考えると、そうあるべきであろう。またそこで用いられている参加型という手法は、これまでの博物館から見学者への一方向の流れだけでなく、見学者から博物館への流れも含めた双方向の関係を生み出す。見学者の意見を確実に展示に反映させることになり、展示の充実にもつながるに違いない。

緒についたばかりの子ども向け展覧会であるが、今後、どのような展示が各館でおこなわれていくか、興味深く見続けていきたいと思う。

付記：本稿をまとめるにあたり、亀山市歴史博物館学芸員の小林秀樹氏、及び辰馬考古資料館学芸員の矢野健一氏のご教示を賜りました。ここに記してお礼申し上げます。

八十島吉蔵氏寄託「ガンダーラ仏伝図」石製浮彫

米 田 文 孝

2001年6月、大阪府在住の八十島智子氏より亡夫吉蔵氏がガンダーラ地域で入手された石製浮彫断片3点の寄託を受けたので、ここにその概要を紹介する。これらの浮彫は、吉蔵氏が戦時賠償によるプラント輸出および日本国内向けの綿花買付担当を主業務とする商社員として、パキスタン・イスラーム共和国にご夫婦で赴任されていた1960年前半頃、現地ペシャワールの古美術商から購入されたものという。吉蔵氏はガンダーラ美術に造詣が深く、綿花の買付をはじめとして地方出張されたときには、寸暇を惜しんで各地の遺跡や博物館を精力的に探訪されていたという。

さて、パキスタンのタキシラからジェララバードにかけての地域には、紀元2～3世紀（クシャーン朝期）を中心としてガンダーラ美術が栄えた〔宮地1981、山本1990ほか〕。現在まで伝わるガンダーラ美術は、仏教寺院遺構をはじめとする各種の建造物と、その内外部に納められたり荘厳されたりした各種の彫刻が代表である。彫刻に用いられる素材には片岩を主とした自然石と漆喰（ストゥッコ）とがあるが、その

前半期は石彫品が中心である。

今回の資料はその形態や法量から、寺院内あるいはストゥーパの周辺に設置された祠堂に祀られた仏・菩薩の礼拝像ではなく、ストゥーパの基壇を荘厳した仏伝浮彫の断片であると推定できる。これらの浮彫の大部分は釈尊にかかる一連の伝記の説

明（絵物語）であり、一般的に特定の挿話を具体的に表現しているが、図相が明確ではなく単に装飾とするものもある。以下、各資料の観察を行い、本来の構図について可能な範囲で想定復元してみよう。

資料1（写真1）は右向き半身で立ち、両手で長頸壺（水瓶）らしき容器を捧げもつ姿態の女性像である。長髪を頭頂で丸く結び簡素なヘア・バンドをつけるこの世俗の女性像は、緩やかに曲げた両脚の足首以下と、右手および持物である壺の口頸部が一部欠損しているものの、その他の部位はほぼ原形をとどめている。また、女性像の背部から臀部にかけての地板部分では、暗緑灰色を呈する新たな破断部分が観察できるが、その他の部位は埋没中に付着したと推定できる微細な土砂が看取できる。

現状の法量は上下方向に最大長13.6cm、左右方向に最大幅5.8cmを測る。同じく最大厚は3.5cm、地板厚0.9cm前後、重量286gを測る。裏面には片理面に顕著な縞状構造とはほぼ直交して、平行する工具痕（鑿痕）が看取できる。この鑿は幅1.0cmを測り、他の2点と比較した場合、ほぼ平坦になる丁寧な整形が施されている。

この女性像は個人蔵の「宮参り」図や「スジャーターの乳粥供養」図〔栗田1988〕に近似した姿態であるが、その持物である水瓶に注目した場合、ペシャワール博物館蔵の「仏誕」図〔金岡・田枝1985〕のような仏伝図を構成する女性像である可能性がある（写真2）。この場



写真1 資料1



写真2 「仏誕」図（金岡・田枝1985より）

合、釈迦族の浄飯王（シュドゥーダナ）の妃・摩耶（マーヤー）夫人と、姉であるマーヤー夫人が出産後7日で世を去ってから釈尊の継母となった王妹・摩訶波闍波提（マハー・プラジャパティー）を取り囲み、太子の出生を喜ぶ四天王や樂神などと共に浄めの水を入れた水瓶を持つ侍女の一人として表現された、世俗の人であろう。ただし、「仏誕」図で水瓶を持つ女性像は、中心に位置するマーヤー夫人とその右脇腹から誕生する釈尊との位置関係から、一般的にマーヤー夫人の右側（左向き半身）に表現されることを勘案した場合、「仏誕」図の構成人物と判断することはできない。

なお、インドでは水を注ぐ儀式（灌頂）はさまざまな機会に行われるが、釈尊も出生直後に頭頂に温冷二種の灌水（浄めの水）が注ぎかけられ全身が浄められたが、これにはナンダとウパナンダという龍、あるいは梵天（ブラフマー）と帝釈天（インドラ）が行ったと伝えられる。また、北伝仏教では時により天から甘露（アムリタ＝甘い水、不死）の雨が降ったともいい、これが中国を経て日本でも陰暦の4月8日に釈迦誕生の像を洗浴する「灌仏会（甘茶）」の儀式となり、今日の花祭となった。

資料2（写真3）は両手を額付近まで高く掲げ、合掌する右向き側面の人物像の断片である。この世俗の人物像は肩部から胸部以下を全く欠落させており、頭部と頸部、肘から先の両腕部のみが遺存する。頭頂部は欠落しているが、長髪を丸く結び簡素なヘア・バンドをつける表現であろう。一見、「四天王奉鉢（商人が供養した麦菓子・蜜団子を直接手で受けることに困った釈尊に、心中を察した四天王が四方から鉢を献じた）」図を代表とする持物をかかげた表現ともできるが、器物の表現が看取できないこと



写真3 資料2

から、ここでは合掌する姿態と措定した。

現状の法量は上下方向に最大長8.5cm、左右方向に最大幅6.5cmを測る。同じく最大厚は3.5cm、地板厚

1.5cm前後、重量186gを測る。裏面の片理面に顕著な縞状構造とほぼ直交して、平行する鑿痕が看取できる。この鑿は幅0.9cmを測り、粗く裏面を整えている。なお、人物像および地板に新たな損傷は看取できない。

この人物像は全体的な表現から女性像と推定できるが、仏伝図の中央部に表現された釈尊を左右の人々が礼拝する図像（写真4）の一人であると想定できる。しかし、一般的にこの種の合掌形態の女性像は数多くの仏伝図に採用されており、下半身の姿態をはじめとした詳細が不明である現状において、それが構成要素となった仏伝図を特定することは困難である。

資料3（写真6）は左脚を立膝にして屈み、開いた右掌を右側頭部に添え、左手には胴部に2本の平行する沈線紋が施された水瓶を持つ左向き半身の人物像である。頭部は長髪をその頂部で大きく丸く結び、紐状のヘア・バンドで束ねている。さらに、耳部付近から別個の紐状ヘア・バンドで長髪を押さえている。脚部をみると、その左足首から下部は欠損しており、右脚は表面部分が剥落しているため表現の詳細は不明である。また、人物像の頭部背面から肩部付近には地板表面から最大厚2.0cmを測る半円形の剥落痕が遺存することから、別個の人物像が配置されていたらしい。

現存の法量は上下方向に最大長11.7cm、左右方向に最大幅8.0cmを測る。同じく最大厚は3.5cm、地板厚1.0cm前後、重量356gを測る。裏面の片理面に顕著な縞状構造とほぼ直交して、平行する鑿痕が看取できる。この鑿は幅0.9cmを測り、粗く裏面を整えている。なお、この人物像および地板には新たな破損痕は看取できない。



写真4 「双神変」図（栗田1988より）



写真5 「16人のバラモン訪仏」図
(Zwalf 1996より)

この人物像は明確な顎髭の表現が看取できないことなど男性像と断定できないが、フリール・ギャラリー蔵の「降魔成道（釈尊が悪魔を退治し、悟りを開いたこと）」図〔栗田1988〕の左隅角部にある魔王（マール）と指定される椅座人物像と類似した姿態表現である。さらに、この人物像が左手に水瓶を持ち立膝の大腿部状に置くという表現方法に注目した場合、大英博物館蔵の「16人のバラモン訪仏」図〔Zwalf1996〕と同様な仏伝図（写真5）の一部と推定できる。この場合、多数の弟子を持つバラモン・バーヴァリアンは、神からコーサラ国の首都シュラーヴァステイーに正覚者の出現を告げられ、16人の高弟にシュラーヴァステイーに赴き釈尊に見えよと命じたが、16人の高弟達は彼らの多岐に及ぶ質問にすべて返答する釈尊に驚愕し、帰依したという〔栗田1988〕。

以上の3点の共通点を見ると、資料3の人物像の鼻頂部が敲打により欠損し、左眼も刺突を受けた痕跡が看取できるなど、その遺存状態から過去に徹底的に破壊を受けた浮彫が細片となったものであろう。その後、遺跡周辺に埋没していたものの、農耕をはじめとした何らかの契機で採取され古美術商の手に渡ったものと推定できる。

その制作技法についてみると、石材には暗緑灰色を呈し、縞状構造が顕著な雲母片岩を使用している。これらは産出地で粗加工して工房に搬入され、厚さ約3.5cmの方形石板状に加工されたものと推定できる。その後、ほぼ平坦に調整した表面に、タフティ・バイ寺院から出土した未製品〔栗田1988〕に看取できるように、あらかじめ基準線を設定し制作する浮彫の図像を

粗く割付けた後、いずれも平坦面から約2～2.5cm彫り込んで図像を構成している。

また、各人物像の地板を含めた厚みは約3.5cmで、類例と比較した場合に薄



写真6 資料3

いという特徴がある。これらは縁部が全く残存しないため当初の外形や法量は判明しないが、類例を勘案した場合、いずれも複数枚で石製奉獻塔を造形・荘厳していた各部パネルであろう。また、人物像の法量や表現方法、裏面加工の共通性などの諸特徴から、資料1は横長型の外形、同じく資料2と資料3は方形型に近似した外形を呈し、分業によりおのおの制作者は異なるものの、表現方法の共通性などから同時期の制作であると推定することが可能である。

【引用・参考文献】

- 上野照夫、1973、『インド美術論考』、平凡社。
 金岡秀友・田枝幹宏、1985、『釈尊その生涯』大学教育社。
 栗田 功、1988、『ガンダーラ美術Ⅰ』佛伝（古代佛教美術叢刊）、二玄社。
 肥塚隆・宮治昭編、2000、『世界美術大全集（東洋編）』第13巻インド（1）、小学館。
 肥塚隆・宮治昭編、2000、『世界美術大全集（東洋編）』第14巻インド（2）、小学館。
 宮治 昭、1981、『インド美術史』、吉川弘文館。
 山本智教、1990、『インド美術史大観』本文編・写真編、毎日新聞社。
 Foucher, A., 1905～51, "L'art Greco-Bouddhique du Gandhara" Tome1・2, L'Ecole Francaise d'Extreme-Orient, Paris.
 Lyons, I. & Ingholt, H., 1957, "Gandharan Art in Pakistan" Pantheon Books, New York.
 Zwalf, W. 1996, "A Catalogue of the Gandhara Sculpture in the British Museum" Vol. I・II, British Museum Press, London.

博物館だより

◇平成13年度博物館企画展「インド・パキスタンの古代都市—都市と村の暮らし～古代から現代～」を、4月5日(月)～5月21日(土)の期間に開催しました。4月4日(日)と5月22日(日)の特別開館日を合わせると2,000名の入館者がありました。

インド・パキスタンの都市文明の成立から現代まで、都市文明が日本の平城京・平安京などどう違うかも浮き彫りになり、見学者の興味を引きました。

また、企画展にあわせて4月28日(土)午後1時から平成13年度関西大学博物館講座「インド・パキスタンの古代都市—都市と村の暮らし～古代から現代～」を行い、50名の聴講者がありました。

◇平成13年度開催の考古学入門講座を、下記の要領で開催いたします。ぜひご参加ください。今回は、最近発見された重要で注目されている5遺跡を取り上げます。

- 第1講 11月3日 キトラ古墳の壁画
関西大学名誉教授
関西大学飛鳥文化研究所長 網干 善教
- 第2講 11月10日 飛鳥京苑池
橿原考古学研究所主任研究員 ト部 行弘
- 第3講 11月17日 ホケノ山古墳と勝山古墳
—大和古墳群の調査から—
橿原考古学研究所副所長 河上 邦彦
- 第4講 11月24日 鴨都波1号墳の調査
御所市教育委員会学芸員 藤田 和尊
- 第5講 12月1日 縄文時代早期の集落・建昌城跡
—豊かな森に生きた定住住民たち—
鹿兒島県始良郡始良町教育委員会主事 深野 信之

会場：関西大学天六キャンパス（大阪市北区長柄西1-3-22）309教室

時間：午後2時～午後4時、ただし初回は午後1時30分から、第3講は午後5時まで。

問い合わせは、関西大学事業局事業課（電話06-6368-0279）へ。



展示会風景



講演会風景

編集後記

『阡陵』第43号をお届けします。今号は、上井久義館長、藤善真澄教授、松浦章教授、米田文孝助教授に執筆いただき、また網干善教名誉教授には明日香村のキトラ古墳で発見された玄武図について執筆いただきました。さらに、宮前千雅子非常勤講師には、近年の博物館の多様な試みの一つについて紹介いただきました。玉稿をいただきました先生方には

感謝申し上げます。

米田助教授の紹介にありますように、故八十島吉蔵氏蔵「ガンダーラ仏伝」石製浮彫断片3点が、大阪府在住の八十島智子氏より寄託されました。今後、博物館にて充分に活用していきたいと考えております。

表紙写真は、故末永雅雄名誉教授復元甲冑の集合で、博物館第2展示室にて展示中です。

関西大学博物館彙報 No.43 平成13年9月30日 発行
関西大学博物館 編集
ナニワ印刷(株) 印刷